

名器が名曲生む原動力に

ピアノリスト 久元祐子さんが新著

生誕250年の楽聖ベートーベン（1770～1827年）は、偉大な作曲家であるとともに優れたピアニストでもあった。当時、産業革命による経済社会の変化に伴い、ピアノは飛躍的に進化した。音域、鍵盤、構造…。「冒険心にあふれた作曲家は絶えず新しいタイプの楽器を欲し、名器が名曲を生む原動力になった」。ピアニスト久元祐子さんは新著「作曲家が愛したピアノからアプローチする演奏法 ベートーヴェン」でその情熱を鮮やかに描き出した。激動の時代を生きた人間の挑戦の軌跡が読み取れる。（加藤正文）



18世紀後半から製作技術は著しく進んだ。シュタイン、ヴァルター、エラール、ナネット・シュトライヒャー、ブロードウッドなど次々と新製品が作られた。ベートーベンは新機能を最大限作品に取り込む。久元さんが評価するのはその革新性だ。「普通こんなことはしないという冒険的などころがあり、ロック歌手のような乗りもある。人がやらない領域に向かっていく精神を思うにつけ、決して古い作曲家ではないと弾いていて感じる」

ウィーンの響きを今に伝えるベーゼンドルファー社のピアノで解説する久元祐子さん。「ベートーベンの音楽を現代に翻訳する際、当時の楽器の演奏経験が生きる」神戸文化ホール（撮影・山崎 竜）

生誕250年 ベートーベンに焦点 楽器の進化が冒険心を刺激

インスピレーション

幼少期に父から与えられて親しんだのが小型の鍵盤楽器「クラヴィコード」。「金属片で弦をつつくだけの本来に小さな音だが、いろんなニュアンスが出せ、打鍵中、指を上下するとピブライトがかかる」。音を滑らかにつなぐレガート奏法の出発点が幼年時代に芽生えたという指摘は興味深い。

取り上げたのはソナタ第8番《悲愴》、第21番《ワルトシュタイン》、第31番、バガテル《エリーゼのために》の4曲。

初期の傑作「悲愴」の頃、使用楽器はシュタインとヴァルターだった。前者は音域が5オクターブのウィーン式アクション。軽やかなタッチで敏感に反応する。後者は（弦を打つ）ハンマーが大きくなり、悲愴の魅力の一つ、低音の響きがより豊かになったという。

生涯に書いた32曲のソナタのうち「最もエネルギーに満ちあふれ、充実した内容と力強い推進力をもった名曲」がワルトシュタインだ。

この誕生に貢献したのがエラール。「音域が5オクターブ半にまで広がり、豊かな音量、複雑さや厚みのある音色を兼ね備えていた。楽器との出会いが作

ひさと・ゆうこ 東京芸大大学院修士課程修了。国立音大大学院教授。歴史的楽器を用いての演奏会や録音に数多く取り組む。著書に「モーツァルトとヴァルター・ピアノ」「シヨパンとプレイエル・ピアノ」など多数。

曲家にインスピレーションを与えた」と分析する。

人間の指だからこそ

最後の三つのソナタ（第30番～32番）は至高の芸術作品といつてよい。使われたのがブロードウッドだ。豊かなバスの音の一方で、「天国に昇っていくかのような長いトリルを弾いている」と音の立ち上がりの良いピアノでこそ可能な語法であることを実感する」という。

久元さんはこれまでにモーツァルト、シヨパン、リストの作品世界とそれぞれが使用した楽器との関連性を追求してきた。

「演奏は肉体を通す。当時の楽器に続いて現代の楽器を弾くと魂が乗り移るようなところがある。鍵盤の深さや音色の感覚が指に残っているので柔らかな音色が生まれるのだろう。技術進歩の過程で失われたものをも一度よみがえらせた。それは人間の指だからこそできる」著書は学研プラス刊。2200円。